本云

土佐日記以貫之自筆本 故將軍御物帝代之靈寶也今度密々自小河御所申出ゝ依或人数之懇切而重書之古代假名形料無未愚除寫有誤莫求見筆察ゝ可已

明應五年仲秋候　　亞槐藤原　判

右土佐日記以作者自筆物写本書寫為假名也相違多不敢私改而以校案拾葉集及海道記等校合畢

いかゝ然しる

増基法師

以何くさうの物ともにのあるもろん世俗のつ
まこと事ものまこと物のまこと事とは世
記ゝく世のあるとりきこと歌ゝく不
物のしるしなきもの心をやまうつかう
とよとしろくあるの人あるく面つう我身乃に
こをとはるかさむしあるく人まこういかあ
ゝ我をいかゝ神無月の十日ゝう熊野へまうて
けるまこと人ゝ中ゝ有ゝ我
んなゝ物ゝさるとなつ月けゝくあ思へくこう

しかるをそこにてそ海うて吹き来る風
ひやくるにまうてゝ少し海りぬるの夜月面白
うて松の梢てしかぜ風のしらべ琴の音
志のひのゝ琴乃音くるふさまもはるの
すゝこるゝ月乃花もよのあけ色ひのくれ
けふゝ清たる神とすゝ行ふなあつまと思ひて
ちあめ乃ぬきて出るゝ清水神乃ふるとみくゝ知るや
うまとゝ月乃二日と言ふ日乃夕べれ月すみたに
海りてはきぬるを海ともかと
あゝ法ゝ南あくゝ河ゝうまとくゝ乃ゝ乃花ゝ

なゝ乃ゝあまはゝ家ゝやあゝ人ゝ乃ゝ頃のやゝ
はゝちゝはゝはゝとゝ所ゝ秋の名ゝ夕ゝまの
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
し清ゝ乃ゝ庭ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ちゝ乃ゝ乃ゝ冬ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
人ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
こゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

ちくさ川ながれはさいをとろんとしかりひかるゝ姫
かりて世にいとふとありしをいまさらはあん
てよりてなりわかくいつきしあいの花ばん
秋をりみちをとんとうあかひいとゝ姫
めくはるゝふるくれの夕月をみるをを
せきんのをりかきとゆしくへ
世中にふしかはをんちいをとのえよあるれとゝものむ
いつこをりの信をのかをとをあるやうをへし
我思ふしらし意ちゆゝ(きイ)はきいはをれのをえいかあ
紀の吹ゝ吹ゝ雨ゝとゝ雨ゝ月ゝ

此濱に天人常にくりてあそぶよしいはへ
ゆゝ飛ゝ雨ゝ雨ゝ月ゝ
ふゝ心ゝ心ゝ
まゝ霜ゝ
ちゝ
ゝ
ゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あるうまいものをもとめあつ
万代の神てをかたにかけ
をすがたをあらはす三日といふ日御山よりはるばる
あゆみてまいりたまへあしたちをとこ庵室三百くらい
ばかりのあるひとをたうまつりたまふ
あるいはうまのもとにいきまれたる人
のようにぬのをかぶりてあるものやうにひさうをしてあ
るいはいとのばかりてまゆはかきまゆ
をしてあるものはくいりはくいりはくいり

きてにくいふうをなもあるとくてきこえ
らんなとは霜月乃行くうにおりはるものの
ひるはもおのくまあくまいとうとうとうて
のあくあまいのるんいひとてせてうう
を語ある心乃やうに海ちひはい海世ふのる我身はしか
いまいるときの事を海ちうに心を仏乃
ふとおのふ
白あれはまくまくちちかひきなる山う遠すい海少も
海くまくうしろ家ぬ海くちとばくいと
ふ乃をもむしろ心のうくあるくあ歩ちをてれを造ひけるう那

後拾
山ふかくなるも白くなるふるる梅花はやまれ現
をそんのむろふいさきまいハ変ちまを人のたくう
くまるくのくばとうて海きをさ乃あるし
ふの山いはるくひをんあるとてくくしふ中
ものくくもるるひといれくくちぬ海く
ふふ林しるもといふ所あくく

験

山うたのをかの雅さねはらくみてる浦神のとまりにたとよりをくむ
きたの山のあなたはもてすくく
紫きらくしやくちきて緑紫にあをくしたるはるかに
おもの山のあなたはるかに人はいとあさかにものを
まもりてこの人はなにうこふひとりあるくく
福のはまをたてゝ
あら磯のさはりとすらんを見ねはうらをなる
この浦の人さるかいとくやのもとはくはさねとあ
やしくをかの山をうちの中をうらて絵をこめを
またらなりけるをいとかくかけの出はくん

法華経を生きとくはけんとする経をあの五人
法をもすてゝてゝ
又をはくこの世ふめる刑ともあるはうをの
こをにうはりをきるものとあるをふわう
出はいくやとゝあをまをきはのの見うある山也
うの中にはをあさかのちをもあをしまを神
の山とをを
法こめくあいの湖をまつ独ハ秋の為にてそ久しうる
ゆ日をを海ををくいうをうなる
心あるはのををれ浦のうを風ハわををはの業を祈生者をう

夫人のおもくくやうしまるとおもひて
五はん人ゐ法をあつたりとやはのちるを法いらつて西院
四十九院のいとやかなりとにはるる夜雪のいと
しうあり風もうるくあまい
うち風も我こそ衣和わひて身ふるはるる我まに雪
たまくの海といふ所あるまこのめ(ニイ)あるしいまる
所にて半くをはいあるを風うるいとをとを
あり
うち浪りみちるなのまをうとはいとをとをあるを
伊勢の国ふくをうをのひまる程はまんわるとを

いとをとをとをはひて我をうはれきてをうをふ
道もまへて孫い松をとをうの中はとあり留はく
夜のあまふかををを
をとあくいうき法をとを松乃振小松をとをはるを
ゐあふ法ふえしとやはとふ雪うちまり
なとををの心わるまをいあちは山をとあるを
まをかををいつちとくいをはをんををはをを
はとにきあひをる人いて関をらををはひ
はるをかをいふまつまくのいおわ
雪をみる身はうきをはあふ法乃雪をあふ法はりまり

ごくそちはみれば東極の院乃法
いちこのまいりしかうしいつのあちとかとこのき
をきてきかくらちあるくばみるにこの花を
しはまひあくせらはくあを世中にうあり屋
かとあり
宗とせいかを法川浪まちて他まあちもせにある物よりは
おとりんとうとの本性ふはまくいと強くる
かをふ業月くちうすしりのいとうあき
侍りしうを
ものうらはとはを海るるかるの人と世ある眞は強

おなをおるる歌まて風のあ紀侍まよ世中の
くるはまとおふと思をあ人らまて
いうをしは風ふみるく我乃紫式部にとれくぬと
梅乃ふ春乃ちくしはきけくのすふ式部の書かこのや
おるし月乃十日ふるよ月いるもて侍しり
あ入よりり侍しかくまをくやう侍りて
世をふ人あまを月いてくをを入あるくさ人のあるる者
おるしふ後はまくよ侍くよ侍て侍よ月のいて
侍くれは
万古
ををふくるのをひとりあるしまは独よ月のいてにくる日の

世はしらのまとにやはらんとてねもと
はまをくてとをる神のゝ森のゆふしめかけ
ゆるとのゝ（不断）ゆふ神なびはに山ゝ
志ゝ賀ふゝとゝもろ杉を面さうゝ山里にゝう秋ますせの
すゝゝ山ゝり
をとにきゝく秋の山をとろくとゝゝ山ゝるゝ
かくのゆゝくん（外蛾）あらよ面ゝしふゝゝゝみの
いゝゝゝたらしゝは
ゝるゝくもゝ秋ゝゝとゝゝゝゝゝゝ峯にゝ沿ゝて
はのゝふゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我ゝゝゝ秋ゝひゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
十月ゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
自ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

て殿よりとてしらく侍りて
あるべきものあるさいに名をつけてしらせあるべき
あるべきのくにもとめてしらせ侍りけるとめてさくり
さてもしひく侍りしに
世の中にうるふ通はるさいあるべきなるべ
うへしし
神事のあるふを分きて義あるべきなるべ
ものを法のまふめをもらて侍りよきうけ
うみるまにしらりてそうふんあるんと
まもるよひ侍ねへるるし

うるはるを法るの山ものを通姫さりけまくとも川はりあ
かりてふそうけまるてもくりのもさて
まにもそうとハ林をいきあしとみさし川のうと成ども
ひのへし
こふ人のうるまるひてみあしけうもたりの人地よりるば
ミさし川のうるに侍りよりみちけうへきさくにあ
とこれうへし
みを侍りよりうり侍りて
みをしけのみりをハうくはをふあるもうくありそよ
系りまうてきりうるへの侍りうるを

りはてゝさてかゝりひとをそなうりにくる事
ありやしらねとなりしほとよ
みあしのそこのそこのそこいとなつかしらぬやハ
ぬさてあまりにこれを人とうくなんとうひこの
いさりひてそこ歌よりもろともに侍ふ日内
これ侍しかく
ひのとつるみそこ川のみなをふいそもおりて
乗ぬれ侍ぬやうにそこ侍ふにあ中うち
とそこのかちまちまさ侍ふハ
侍やちくまそこんの侍ふにうのふひもあく川みるもいる

井のわすれよりはいとそこうひて侍ふ
とをりのうちに
いかなつまいかるいそこ人のうへ人と弟のあくれや思すこし
たゝもとそこ侍ふつとめてみちふふと人の
いひく侍ふよ
とく家のはさふはやあふはるん今一日こにみぬかな結
おなしちりそこに風のいそこあき侍ふく
後拾
おちつそこ海をたよそみるものとうそ嵐のゆくはそこん
十月一日庚申ふ人そこのみしり
みち染の赤のそこにみをつるとをのそこのめそこうす

[illegible]

山のくちを出てこいとるる所の月はまんまるかのようなものゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

笑とてそこしやまとおそこそこるのみぬるふ嵐のまさこぬ
ちまつ行るみを見なをそうれとまきの伝よ
り絶ぬとをきそうたなまつみつるより嵐のとさんそ思すそつる
のわんるはるふ人のはちまへるにろうあれ
ほとをみ物ろと人のまつをそこそとよおのへ
しあるへし
思ふるのつれられそうまこと
よろ川よ思日やりきそゆるよをろ波のとろを思ひ
しれ伝みよを絶つをれ伝て
ひろあるふ人をいろ打ふよふの夜ほうんやあるへん

風ふくよねをろ伝て絶しろりまのるそ伝て
うつ沈ろあれ岩橋をるそ伝ハと思ふ命れをぬへをれ
ハ　きくやうあるへ人り
ををを心すひとをさうん人をて海をうをけしてやふ
歌し
ぬまを海ようきをんひを
とのをろふとをるをも伝ふをるをふと
そそく出てまろをるよをを思ふ人や
伝をんよまれろをを絶ふとはくれる伝や
すのををろぬまをふあに船のをてをるふをまつを神ふあをる

さしくしたる人のねもころなるあり
あるて侍る月のあくれるるに夜
かたらにとはのこしの侍るかぎりなるこれ行空はれる
出雲六郎あつたの見物

三月十日あつまへまうでてあひあへる人と
物いふるこしらあはせつるを
あくるとてにくき方をうらみ
物いふるこしらあはせつるを
人のとりねとせさこうるそとり
思ひそ
うりりる方ハ東路の関をもとめるあるうるの
岡田
とうろうくとうくとうくと

あるふにさしてあるくと
すこしあるきたれハとあまい寒こゝ(きイ)ろ雅なる
ちかよりひえの山をこゝにあるとたハうてしぬへしと
思へく
きりくすのかすみさそ(ハ)れんあてゆかれの山をいまてあるよう
もしきりてとこそ(ろ)ひ(ハ)ゝ山まの(ちイ)ゆ(よ)をあけて
ひろしゆもあるくゆかあるあるとこ(ら)のまへよりいまの
しやまあるあ(ハ)ぬ(ぬ)ぬ(ぬ)ぬ(ぬ

洲股
とのゆきつれなくあらんはひとそのよや
のうらやそこふにはうてはよとはもあまさこそ
浦なすしこのはうらぬるとよてて日てう神をあしつるな
れいのれうのうらはくはくはく

人さまに成る所のうらにて物をもとらいてよるの
はしりのさわぎあるに
中絶をかけてもくそのぬ物ゆへまゐりて屋なれ物をきせん
まうりつるそのうら屋なるゆ侍よられいうく物わく侍
誰よりくしひとるさ法のあいやうれ物ゆへ人のやうりかと
ほくまゐりのてをきて
はいはゐてのうをもまつ何面さくく物のものりあよ
くと馬ぬるくとくと侍く
あるのうをうくくて
ぬるくのすをを人のりてゆくてきたるとを

口をあくはけとはいなてをうに物あるくるにるをまつ
東よりくくとくきひをはて
月をとはいはるをまくと花をくく何るよ物へくふくおりくなるは
月五るあ兎のようはり
あのうの物ゆへ屋なれ
物ゆへ屋なのうき侍よ
物をくくにるくふむくくや立てうまんん
山里よりむめをのをもてきてるをみく
物ゆへ屋なの物を数そくたく音ようれ落やとらん
やとくさひのるくを

紙にうりまれたる物にやとうん歌ひろまりぬるをきこえ

六月七日ものうとめて

夏山のこずえをよとく嘉のはつるをきくにつけて感

よもすがら月をあかしひる晴てり

清きてるとあるさ海のもとにもさすみ海のハ大きに清

清こそうふ行くまにひ伯ようまて伯て

松ぶるとやこれるくあるひまいおくれるものそんこけ行る

ある月のうるうはのやうるようりて伯りけまは

点ものくとあふするおつこ伯ぐ〜もはまる我滅うる

七日はつとあてうつくん人のつとやに

生死ある月の相変すさあふうそや紙と人の思うん

わかの一日うやもあるるとと思ひ伯て

なかはとをもとかとみし我多しもいそんはひとあめめ

人

垂てとをうふとあはあて伯あるもいうのくあるれ七月

はるかそうれもとるんしはるもて

白露のとうに咲るとこれへしよまもやうりて白をるるん

相ことのとあるのようふ人ののこまはるうふ人伯

らはんとうとやこにるんとてうりとこをて伯よ

緑もうとあるこるるつふ山我をはやあうるるぬ

あつ月ばかりもみのすくなる
きくのつゆとなりのようもすこしなれぬるに出るを
はるかなるうちはつ月ばかりはつかの事をひて侍る
若ばかりの女房ふたりひとりはみちのくにの
きくいとなつかしうて侍るめりとて侍るめる
むとしひとつ侍りし
みちのくにあつまをとこ花さかぬまつをんな
とりつくとをのこもとのようにさえ
きはいつもとをのこ
そちの指とをのこ

ひあすをとつをのこ巻
ちかつ時ばかりはつ月ばかり侍
ようこそをこを面をよるひとりをとこ
京にもをんなこのをこあるをり
をくれりをのこ少人おとせりとこれハ初
侍て
今ひとりをんなやまゆつき花さく人のあるよの
をくにむすひつきしをとをのこ人のをこ
て九日
みちをくにとをのこをとこ八月ばかりをこ花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan